
機動戦士ガンダムOO—STARGAZER's innovation—

メイブ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

機動戦士ガンダムOO―STARGAZER―s i n n o v a
t i o n―

【Nコード】

N2811Y

【作者名】

メイブ

【あらすじ】

スターゲイザーとの戦闘から「彼女」との出会い、そして「自分」を取り戻した。しかし、彼の戦いはまだ終わっていないかった。破壊と再生その先に彼は何を見出すのか？

介入（前書き）

処女作ですので至らない部分が多々あると思いますがよろしく願
いします。

介入

—— さあ、帰りましょう ——

「ヴォワチュールリュミエール展開…」

「……」

「このスターゲイザーは外宇宙探査の為に作られたモビルスーツ。太陽からの風を微粒子の量子の膜で受けて推進力にするの。最初の1秒では0, 5cmしか移動しない、でも1分後には18mの所まで移動する。1時間後には出発点から64kmの所にあり、時速128キロに達する。1度走ったら無限に加速し続ける…帰れるわ。必ず…」

彼と彼女は身を寄せ合う…

「照れ臭い？」

「ちょっと…」

「もう、少しの辛抱ね…段々感覚が無くなって行くから…」

「あなたに似ている人を知っているような気がする。」

「ふふっ、そう言えば昔そう言って口説いてきた人が一人いたわ。——もう死んじゃったけど。」

「ッ! すまん…そういう訳じゃ…」

「クスッ！照れてるの？」

「からかうな。」

「あなた名前は？」

「…スウェン。」

「おやすみ。スウェン。」

「君は！？」

「私？私は…」

「彼女」は最後まで言わず眠りに着いた。そして彼もまた微笑みと共に眠りに着いた。彼らはこのまま帰れるはずだった。

しかし彼はまだ知らない。自分が新たな戦火に身を投じようとしていることを。



——何十時間ただただろうか？スウェンは目を覚まし、周りを見通す。スクリーンに映るのは相変わらぬの黒い海とデブリが広がるだけだった。

しかし、異様な事に気づく、体に痛みはなく、コックピットのモニター、操縦系、全てがスターゲイザーの物と異なっていた。そして何より「彼女」が隣にいなかった。

「どうゆう事だ…」

スウェンは普段の無表情が完璧に崩れていた。

「これではまるで…」

スウェンは機体を機動し始める。モニターに出た文字は…

——Setting up——

General

Unilateral

Neuro-Link

Dispersive

Autonomic

Maneuver

Synthesis System

Ok, stand by ready

— G A T — X 1 0 5 E S t r i k e —

striker pack || Noir striker

system all green

[illegible]

「これは、ノワールか！？ 何故だ！ あの時にすでに……」

そう、彼が搭乗していたのは間違ひなくスターゲイザーとの戦闘で大破し、行動不能となった彼の機体だった。

「どういう事だ?…これは…」

しかし、彼にそんな事を深く考えさせる暇も無く機体が警告音を鳴らした。

——ビーツ！ビーツ！ビーツ！——

ヒュン!

オレンジ色の粒子がノワールの頭を掠める・・・

「チイツ、どこからの攻撃だ!?!」

スウェンは直ぐに頭のスイッチを切り替える。そして目の前に赤いモバイルスーツを見た…

「IFFに反応がない!?!いや、それ以前なぜこんな近くに来るまでリーダーに反応しなかった!?!ミラージュコロイドか!?!」

スウェンは強く操縦桿を握り絞め、目の前の脅威を「排除」する事に集中した。

「スウェン・カル・バヤン、ストライクノワール目標を排除する。」

その声は冷たく、彼が戦士として今一度目覚めた瞬間だった。

こうして彼の更なる戦いが始まった…彼は「破壊と再生の世界」で何を思うのか?

介入（後書き）

コメントお待ちしております

黒いガンダム（前書き）

中々考えがまとまりませぬ。

黒いガンダム

「ソレビーイングのガンダム搭載のスペースシップの所在が分かったと？」

グッドマンは不敵な笑みを浮かべる。

「流石はカタギリ指令やることにそつがない…！よしッ！MS発進！今度こそあの忌々しいテロリスト共の息の根を止めろ！」

アロウズの艦からMSが出撃し、ソレスタルビーイング殲滅へと向かった。

「待ってくださいD-32ポイント、レーダーに感あり、MSの様です。」

「何？CBの別動隊あるいはカタロン共か…MSを2機発進させろ。」

「了解。ジンクス？発進。パイロットはMSハンガーへ。」

『了解しました。』

パイロットからすぐに連絡が入り、2機のジンクス？が出撃した。

（ガンダム……）



「あと2分程で目標に接触します。」

ルイス・ハレヴィは喜びと緊張で満ちていた。

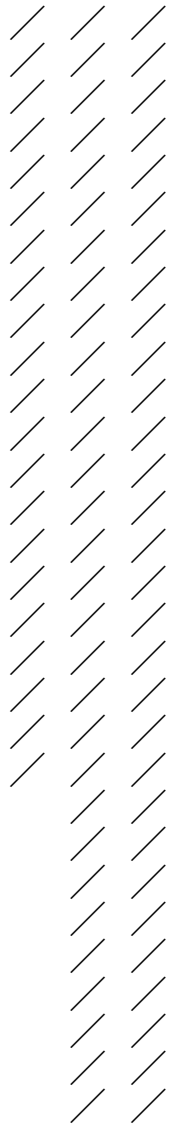
「ぬかるなよ。少尉。目標は何か良く分かっていない。」

徐々に目標との距離が近くなり、2機は目標を補足した。

「ガンダムッ…！」

「黒いガンダムだっ！目標は敵ガンダムと確認！これより戦闘に入る！」

粒子が収束されGNランスからビームが放たれた…



——「スウェン・カル・バヤン、ストライクノワール目標を排除する。」——

ノワールはビームライフルショーテイーを構え目標に放ち牽制する。シンクス？は身を翻し距離を取った。

「何だコイツは！？粒子を出していないだど？それにビームの色も他のガンダムと違い緑だと！？」

「中尉！私が仕掛けます！」

「迂闊だぞ！少尉！まて…」

ジンクス？が加速しながらビームを放ち、近接戦闘に入ろうとする

「ガンダム…ッ！今度こそお前を…！！」

ノワールは必要最低限の動きでビームを避け、ビームブレイドを右手に持ち、ブーストを吹かせ加速する。

「何だこのパイロットは？動きが直線的すぎる。」

そう言うのとGNランスを突き出した両腕をノワールはすれ違いざまに両断した。

「ッ！！！」

「終わりだ…」

ノワールはビームライフルショーテイーをジンクス？のコクピットに突きつけた。

「少尉から離れろ！ガンダム！」

ノワールが撃つよりも早くもう一機のジンクス？が突撃してきた。素早くノワールは両手にビームブレイドを持ちGNランスを受け止

めた。

「少尉、一時撤退しろ！」

「ッですが！中尉を置いては！」

「その機体状況で何ができる！？居ても邪魔なだけだ！」

「了解…」

ルイスのジンクス？が戦線を離脱した。

「一機は離脱したか…あと一機！」

スウェンは目の前の機体をモニター越し鏑迫り合いをしているジンクス？を睨みつける。

「エネルギー残量も少ない。早めに仕留めなければ…」

そう言うスウェンはペダルを深く踏み込みバーニアを吹かした。

「ツツツツ！！！！クソッ！」

ジンクスもまた出力を上げた。コーン状のバーニアからオレンジ色の粒子が濃く流出され始めた。そして徐々にノワールを押し始めた。

「チィッ！出力で負けているか…ならば！」

ジンクスのパイロットは高揚していた。パワーで押し始めていた今この瞬間に…

「ハッ！ハハハッ！出力では此方が優勢！」

そしてもう一度出力上げようとペダルを踏み込んだ…その瞬間―

「ここか…」

スウェンはバーニアを急停止させた。そしてノワールは鰐迫り合いをしたままジンクスの頭上に身を翻した。

ジンクスは慣性に逆らえずそのまま前に進み、ノワールに背後を捕られた…

「クソッ！やるな…！」

ジンクスのパイロットは焦りながらも素早く機体を反転させた。

しかし遅かった…

ジンクスのセンサーが警告音を発する。GNランスを再び構えようとした瞬間、ノワールのビームブレイドがジンクスのコックピットを捉え目前にまで迫っていた。

「うぁア！クソッ！！！」

ジンクス？のモニター越しに映るピンク色光が見えた。そして次第に飲み込まれていった。

『お前達は必ず再び報いを受ける時が来る……』

接触回線越しにジンクス？のパイロットの声が聞こえたが、ノワールはそのままビームブレイドでコクピットを切り裂いた。

両断された上半身と下半身が爆散し、オレンジ色の粒子が散った。

「戦闘終了……報いか……」

そう言うときスウェンはヘルメットを外した。

黒いガンダム（後書き）

戦闘描写難しいです…

接触（前書き）

所々アニメと違うかもしれません。ご了承ください。

接触

スウェンが戦闘開始した時、他方でも新たな戦火が広まっていた。

「此処には…エクシアと…Oガンダムと…俺がいるッ！」

その瞬間ダブルオーのデュアルアイが光を灯し、目前に迫っていた粒子ビームをGNフィールドを発生させ消し去った。

「新型だと！」

「アヘッドで叩く！」

アヘッドとジンクス？のパイロットは動揺しながらもダブルオーに向け粒子ビームを撃ち出すが、ダブルオーの高機動により全て避けられた。

「ダブルオー…目標を駆逐する！」

GNソード？から粒子ビームが放たれ、アヘッドに命中し、爆散した。すかさず、ダブルオーはジンクス目掛けて二射目を放った。

「チィッ！」

ジンクスは粒子攪乱幕を周囲に撒き散らせ、ダブルオーの粒子ビームによる攻撃を防いだ。

「接近戦ではコッチが有利ィィィ！！！」

ジンクスがダブルオー目掛けて、GNランスを構え、突撃した。一方、ダブルオーもGNソード？をソードモードへと変えた。

「これが…俺達の…」

ダブルオーのGNソード？がGNランスの切っ先より切り裂き、そのままジンクス？を両断した。

「ガンダムだ！！」

そして、ジンクス？が爆散する。

「刹那……」

ティエリアが喜びと安堵の声でそう呟いた。

アロウズは状況が不利と判断したのか、艦から照明弾が打ち出され、撤退していった。

「ふう、やっと一息つてどこか。」

ラッセは額の汗を拭った。

「敵モビルスーツ撤退していくですう！」

戦闘が終わったと見て、皆が安堵し始めたが、その空気はフェルトの一言で一変した。

「待ってください！D-32ポイントにMS2機を確認！」

「何イ!!!!」

再びトレミーは戦闘体制に入った。

「刹那！トレミーの防衛は僕に任せてくれ。君は先制して攻撃を！」

「了解した。ティエリア頼んだぞ。」

ダブルオーの2つのGNドライブから多量の粒子が放出され、目標へと飛翔した。



「目標を捕らえた。これより攻撃に……ッ！」

戦闘を開始しようとした刹那だが目の前の状況に目を見張った。

「どうした！刹那！」

言葉を詰まらせた刹那に対し、ティエリアからの通信が入ってきた。

「目標は互いに交戦中……」

「何！？どう言うことだ！」

刹那はもう一度目の前の状況を確認する。

「一機はジンクス、もう一機は……ガンダムだ…黒いガンダムだ。」

「ガンダムだと！」

刹那達が通信をしている内に目の前のガンダムはジンクスを撃破した。

「黒いガンダムが…ジンクスを撃破…」

「敵か味方か。どちらだ？刹那、その機体とコンタクトは可能か？」

「分からない。試してみる。」

『そのモビルスーツ聞こえるか？聞こえていたら返事をしてくれ。』

刹那は呼びかけるが一向に返信はない。

「向こうからの返信がない、近づいて光通信を試みる。」

ダブルオーは黒いガンダムに向け移動し、目の前に立った。



スウェンが戦闘を終了し、一息しようとしたのも束の間、目の前に青いMSが姿を現した。

「また粒子を放出するMSか！」

スウェンは戦闘体制に入ろうとビームブレードを再びノワールに構えさせようとしたが、目の前のMSが武装を手にはせず、ゆっくり近づいて来るのを見て、思い留まった。

「戦闘の意志はないのか？それに粒子がああ赤いMS達と違い、緑色だ？」

目の前の青いMSの頭部が点滅し始めた。

「光通信？戦闘の意志はないだど？」

スウェンは此方にも戦闘の意志が無いこと伝えるためノワールの頭部センサーを光らせる。そうすると青いMSが光通信で「ついて来い」と言う合図をした。

「エネルギー残量の少ない今、こいつについて行くしかないか…」

スウェンは目の前のMSに追従するように着いこうとすると、後ろからまた別の緑色の粒子を出すMSが現れ、連行されるように着いていく。

「こいつは青い奴の味方か。下手な行動はさせないという事か…」

暫く、着いていくと目の前に巨大なスペースシップが徐々に姿を現し始めた。そして、3機のモビルスーツがスペースシップに格納されて行く。

「油断はできないな…」

ノワールが格納され、外でコクピットを叩く音が聞こえる。

そしてスウェンはノワールのコクピットハッチを開き始めさせた。スウェンの額に汗を浮かべながら、両手を頭上で組んだ。

「さて…どうなるか……………」

接触（後書き）

やっぱりノワール改造的な必要かな？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2811y/>

機動戦士ガンダムOO—STARGAZER's innovation—

2011年11月16日09時40分発行